

受験の中での大きな成長

茗溪塾塾長 長谷誠基

2月に入り、この便りが届く頃には中学入試は終了しています。そして、高校入試は東京の私立入試に続き各都県の公立入試が行われ、大学入試は私立大学に続き国立大学の入試が行われます。この年代は新型コロナウイルスの影響を3年間丸々受けていますので、学校生活などでもいろいろな苦労があったと思います。勉強面でもスタートの時期にオンラインの授業などがあり、なかなか思うように学習が進まなかったはずですが、それにも負けずに努力を続けてきたのですから、何とか良い成果を出してほしいと願っています。

受験の時期は、全員全ての学校に合格してほしいと思っても、なかなかそうはいきません。合格の嬉しい知らせもあれば、不合格の辛い知らせもあります。塾の先生は天国と地獄を行ったり来たりの時期を過ごすことになります。

ある年、1人の中学受験生がいました。決して良い成績ではなかったものの、夏期講習を頑張った成果が出て、少しずつ模試の成績も上がり、過去問も点数が取れるようになってきました。春の時点で第1志望だったA中学の合格最低点も超えることが多くなり、秋の面談でA中学の12月1日の第1志望入試を受けるかどうか、相談になりました。そのとき、9月に文化祭を見に行ったB中学を本人が気に入り、そこに行きたいと本人は言っているが、保護者としては心配なので、12月1日を受けさせたいということでした。そこで、A中学の過去問でまだ解いていない年度の問題を解かせ、それが合格点に達したら、第1志望入試を見送りましょうと提案しました。そして、過去問で合格点を取った彼は、12月1日は受けずに、B中学を目指して勉強することになりました。しかし、12月に入り授業などでの実戦テストであまり点数が取れなくなっていくます。どうしたんだろうとは思いながら、本人の力を信じ、入試に突入しました。はじめの試し受験の学校を合格し、A中学の入試、過去問では合格点が取れていたはずの学校でしたが不合格になってしまいます。それに続く、C中学、2回めのA中学も不合格。この結果を受けて三者面談を行うことになりました。話を聞いていくと、家ではかなり反抗的で、勉強も雑。過去問をやってもあっという間に解き終わり、見直しもしないという状況だったことを聞きました。おそらく実際の入試でも本人はそのつもりがなくとも、同じようにやってしまっていたのだと思います。やはり気持ちの問題だったようなので、本人と問題の解き方、やり直しのやり方を確認し、中学受験は自分一人の力では突破できないこと。家族のみんなのサポートがあってこそだということ、自分自身がもう一弾成長することができれば合格できるという話をしました。

そして迎えたB中学の入試。お母さんが説明会でメモしてきた問題が全て出て、見事合格することができました。報告に来た本人の顔はとても晴れやかで、お母さんのいうことにも素直に受け答えしていました。不合格の経験が本人を成長させてくれるということもあるのが受験というものだということを、再度認識した年でした。